

長谷川修一著

『聖書考古学』

——遺跡が語る史実——

桑原久男

評書

「旧約聖書」と「新約聖書」から成る聖書は、言うまでもなく、キリスト教やユダヤ教の聖典として崇められ、祈りの場で用いられてきた宗教的な書物である。また、聖書に描かれた様々な物語は、その根底に聖書を基幹とするキリスト教文化が存在する西欧社会ばかりでなく、今日まで広く人類にとって普遍的意味を持ち続けてきた。このような聖書に関心をもつ人が、そこに語られる「歴史」に興味を持ったとき、気軽に楽しく読めるようなものを目指すと、新書版の体裁を取った本書が課題とするのは、ずばり、聖書の「史実性」である。信仰の対象としての聖書から距離を置き、聖書を「人間が何らかの意図を持って書き、また編集したもの」として扱い、聖書の物語のいくつかについて史実性を否定する本書の内容が、信仰と相反すると感じるならば、本を閉じてもいいとまで最初に釘を刺す。著者の講義を聞いたクリスチャンには「晋教的」との感想を寄せた人もあるらしい。しかし、著者は、「信仰をもつ人にとつては聖書に対するより深い洞察へ

と至るきっかけになることを願う」と、余裕たっぷりだ。

このような刺激的な書物の著者は、一九七一年生まれ、立教大学、筑波大学大学院で古代オリエント史を学び、日本隊がおこなったイスラエル、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査に参加し、テル・アヴィブ大学ユダヤ史学科でナダヴ・ネエマン教授の指導のもと、古代イスラエル史をテーマとした博士論文を完成し、同地域における考古学と文献史学の双方を実践的に研究している俊才である。盛岡大学准教授を経て、現在は、立教大学文学部キリスト教学科准教授を勤め、評者らとともに、イスラエル、テル・レヘシユ遺跡の発掘調査に従事している。本書では、このような経歴を踏まえ、ここ数十年の古代イスラエル史研究、聖書学、考古学で積み重ねられてきた学問的成果について、今日の学界で中心となっている意見、現段階で言えることをできるだけ中立的かつ平易に紹介し、ふだん聖書になじみのない読者をも聖書の世界に導こうとしている。

以下、本書の章立てに沿って、かいつまんで内容を追ってみよう。本書では、イエスによって新しい契約への道が開かれた「今」と「今後」に関心とする新約聖書は扱われず、民族の歴史を神との関係の中で解釈してゆく旧約の「歴史書」、つまり、「律法」（モーゼ五書）の一部と「前の預言者」（ヨシヤア記、士師記、サムエル記、列王記）が題材となっている。

第一章「聖書はなぜ書かれたか」では、いつ、誰が、何のために書いたかが、まずわかりやすく解説される。時代錯誤や誇張などが含まれている聖書の物語の多くについて、「創作的な物語も

また立派な歴史資料であり、その話がつくられた時代の人々の考え方、暮らしを豊かに教えてくれる」とする著者の基本姿勢が示される。書き手が読み手に対して発信したメッセージを読み解くことで、時代背景が推察できると言い、具体例として、マルティン・ノートが五〇年前に提出した「申命記史家」「申命記史観」に関わる学説が紹介され、ヨシアの治世に神殿から「律法の書」が発見されて宗教改革が行われたという列王記下二二章三―八節の記述が、権威を高めるための創作であり、「崇拜のエルサレムへの集中」を通しての「中央集権の強化」という「政治的プロバガンダ」だったと見られることについて、読者に気づきを促そうとする。

第二章「考古学は聖書について何を明らかにするか」では、遺物と遺構の研究を通して人類における過去の文化を明らかにする考古学という学問の「得手・不得手」な分野が確認される。また、研究者の間では聖書の記述よりも実証的・客観的としはば考えられる考古学のデータの方にも考古学者の解釈が介在し、同じ事柄を別の解釈で説明することが可能であるなど、考古学も必ずしも「客観的」ではありえないことが強調される。

考古学の特殊な一分野として知られる「聖書考古学」は、「歴史考古学」でもあり、「宗教考古学」でもあるが、聖書の史実性を考古学的に実証することが当初の目的で、聖書考古学者は同時に聖書学者でもあった。ところが今日、聖書考古学の意義と役割が見直され、史実性の実証からは意識的に距離を置くようになり、ここ数十年、「聖書考古学」という言葉は忌み嫌われさえしていると言う。考古学に重点が置かれる場合は、「パレスチナの考古

学」「イスラエル考古学」と地名を冠したり、「聖地の考古学」「聖書の世界の考古学」など、「聖書考古学」という言葉避ける傾向があり、これは、過去の「聖書考古学」の非科学性との断絶を示す意図もあるという。しかし著者は、発掘の成果を聖書の記述との関連で扱う本で「聖書考古学」という言葉を使うことには問題がないとして、「聖書の歴史記述の深い理解に達するため、特に聖書の舞台となった古代パレスチナを中心とした考古学」として「聖書考古学」を定義づける。

そう、本書は、『聖書考古学』と題してはいるが、考古学ではなく、明らかに聖書に軸足を置いているのだ。本書においては、聖書の記述の史実性を検討する史料批判のために有効な比較材料の一つが考古学なのであり、聖書の理解を助け、また聖書の書かれた時代、聖書の描いている時代を理解するうえで、重要な資料を提供してくれる考古学は、「聖書に対するより深い洞察」を得るための手段として位置づけられている。そうした観点から、続く第三章から第六章では、族長時代からヘロデ大王の時代まで、歴史史料としての聖書研究、考古学的調査研究の双方の研究成果を比較・参照し、聖書に書かれた歴史とその史実性を検討することで、聖書記述に込められた書き手のメッセージを考察しようとしてみる。

第三章「アブラハムは実在したか——族長時代」では、創世記一二章―五〇章に記される族長たちの物語が取り上げられる。族長時代は、聖書に従えば、紀元前二二〇〇年―一九〇〇年頃、考古学では「中期青銅器時代」が時代背景と見られてきた。しかし、父祖たちの物語にラクダが登場していることは、西アジアにおけ

るラクダの家畜化を後期青銅器時代（前一六世紀以降）とする近年の定説と矛盾がある。マリ文書、アマルナ文書、ウガリット文書など、遊牧民に言及した紀元前二千年紀の文書にはラクダが登場しないが、紀元前一千年紀のアッシリアの文書や浮彫にはラクダが見られるのである。また、物語に描かれるペリシテ人がパレスチナに登場するのは実際には後期青銅器時代からである。このように、族長たちの物語が文字として記録されたのは紀元前一千年紀であり、時代錯誤的な要素が父祖たちの物語に入り込んだのは、物語が書かれた時代の読者にわかりやすいように書かれ、そこに託された教訓やメッセージも一義的には当時の読者に向けられたからなのだ、と著者は述べる。

第四章「イスラエルはカナンを征服したか——土地取得時代」では、モーゼがエジプトから導き出したイスラエルの民がパレスチナに入るまでを描いた「出エジプト記」、新来のイスラエル人と在来の「カナン人」（と呼ばれる諸民族）との抗争が物語の中心となる「ヨシユア記」と「士師記」が扱われる。出エジプトの年代は、聖書によると、前一四四〇年頃と計算されるが、この時代は、パレスチナ地域の各都市国家の王たちがエジプトを宗主と仰ぎ、エジプトの代官がパレスチナの各地に駐留して支配をしていた後期青銅器時代にあたり、時代背景が物語と符合しない。一方、出エジプト記に「ラムセス」の町の名が見えることから、出エジプトを前一三世紀のファラオ、ラムセス二世の治世の出来事と考える説もあり、後期青銅器時代末に「海の民」と呼ばれる人々がこの東地中海地方一帯に襲来し、人口変動や不安定化を引き起こした変化の時期と運動するとも考えられている。しかしこ

の説も、著者によれば、文献学的・考古学的に十分な根拠がなく、仮説の域を出ない。

出エジプトのルートについては諸説があるが、エツヨン・ゲベル、カデシユ・バルネアのように、行程に登場する地名に多くの時代錯誤が見られ、物語に紀元前一千年紀の地理的現実が反映されている。ヨシユアによるカナン征服の物語に関しては、キャスリン・ケニヨンによるエリコの発掘では後期青銅器時代の終わりには破壊の跡が見つからず、ヨシユアがエリコの次に征服したアイの町については、発掘調査でその時代に人が住んでいないことが判明し、多くの研究者は、聖書が書かれた時代にアイが廃墟であった原因を、カナン征服の物語に求めた原因論的な物語だと見なしている。一方、イガエル・ヤディンによるハツォールの発掘、ダヴィド・ウスイシユキンによるラキシユの発掘では、後期青銅器時代末に町が破壊された痕跡が見つかっている。しかし、この問題について、聖書の記述と発掘の成果を単純に比較しても生産性のある答えはみつからないというのが著者の評価だ。

このようにヨシユア記の記述が必ずしも発掘調査の成果と符合しないのに対して、この半世紀ほどの間に、イスラエル人たちがパレスチナに定着する過程をより忠実に描くのは、ヨシユア記よりも、初期鉄器時代、すなわち紀元前一二〇〇年頃から一一世紀中頃にあたる士師記の方だと考えられるようになってきた。士師記一章一九節には、山地のユダが鉄の戦車を持つ平野の住民を追い出せなかったとの記述があり、当時のパレスチナが、「中央山地」のイスラエルと、平野部のカナン人勢力に二分されていたと見られることについて、かつてアルブレヒト・アルトは、エジプ

ト人のパレスチナ支配は平野部が中心で中央山地には及ばなかったことを明らかにした。その後の考古学的研究では、初期鉄器時代、中央山地に小規模な集落が増加されることが指摘され、「四部屋式住居」、「堅椋形口縁貯蔵壺」といった中央山地の物質文化が初期のイスラエル人と結びつけられるようになった。しかし近年、遺構や遺物など特定の物質文化を直ちに特定民族と結びつけることの問題が指摘され、アヴラヒム・ファウストは、中央山地の人々が、平野部の住民との文化的差違を自ら意識し、アイデンティティーの維持のために意図的に物質文化を再生産したと結果と見る興味深い説を唱えている。初期鉄器時代の平野部の遺跡から豚の骨が多く出土するのに対して、山地の遺跡からは出土しない事実からは、豚を食べてはいけないと考える人々が当時の中央山地にいたと仮定することもでき、次第に独自のアイデンティティを形成して後にイスラエル人として「出現」したとも考えられる。

第五章「民族の栄光と破滅——イスラエル王国時代」では、紀元前一世紀の中頃から、考古学では初期鉄器時代とされ、王政が導入されて初代王サウルが誕生するサムエル記の時代が取り上げられる。ダビデとゴリアトの一騎打ちの物語には武装など時代錯誤的な要素が見られ、ダビデ・ソロモン時代のイスラエル統一王国の繁栄が考古学的に裏付けられるかが、昨今論争の的になっている。同時代のエジプト、アッシリアの文献にはソロモンもダビデも登場しないが、一九九〇年代に発見されたダン碑文はアラム語で「ダビデの家」と記し、紀元前九世紀の終わりにダビデの子孫と称する人々が存在したことが明らかになった。その一方、これまでダビデ・ソロモン時代を紀元前一〇世紀とされてきた考

古学の遺物や遺構を紀元前九世紀に位置づけなおすフィンケルシュユタインの学説（低年代説）が登場し、たとえば、エルサレムのダビデの町で新しく発掘された「宮殿」で見つかった鉄器時代ⅡA期の遺物が一〇世紀なのか九世紀なのか、従来の年代観と新しい低年代説との間の論争の決着がつかないのだ。

王国が南北に分裂した南北朝時代は、著者の最も得意領域だが、坦々とした記述に終始し、一般読者にはやや難解な内容になってしまっている。北イスラエルと南ユダの王の何人かが、アッシリアの文献に言及され、モアブの「メシャ碑文」も北イスラエルの王名を記すなど、古代イスラエルの「暗黒時代」が終わる紀元前九世紀、オムリの時代には、イスラエル王国が伸張し、モアブ王国を圧迫していたが、オムリの息子アハブの時代には形勢が逆転し、メシャ碑文は、「イスラエルの滅亡を見た」と記す。クーデターを起こしたイエフは、アッシリアの碑文に貢納の記録が残り、アッシリアの属国となった北イスラエルの姿を伝える。

第六章「一神教の形成からキリスト教へ」では、紀元前五八六あるいは五八七年、新バビロニアに滅ぼされたユダ王国が歴史の幕を閉じた「捕囚時代」以降の歴史が解説される。「捕囚時代」とそのあとに続く「ペルシャ時代」については、十分な理解に達するには文献・考古の資料が不足している。この時代のパレスチナの現状はよくわからないものの、ユダヤ教がその宗教共同体としての基礎を確立した時代として非常に重要だ。北イスラエルの民がアッシリアの同化政策によって歴史の上から消えてしまったのに対して、南ユダの人々（ユダヤ人）が長い歴史の中で連綿と命脈を保ったのは、エルサレムと神殿が破壊された惨事を民の不

信仰ゆえに神からもたらされた罰としてとらえ、ひとえに、この時代に確立した律法を遵守することで、自分たちのアイデンティティーを保ってきたからなのだ。

最後の第七章「聖書と歴史学・考古学——現在と展望」は、前章までの記述を踏まえ、学問としての聖書学、歴史学、考古学の現状と課題を古代イスラエル史との関係で概観し、今後の方向性を展望すると同時に、著者の学問的姿勢が明白に述べられている重要な部分だ。すなわち、聖書を「批判的に」読むことが宗教・宗派を超えた学問的対話を可能にし、歴史学と考古学が相互補完的な対話することが古代イスラエル史研究に不可欠だとして、現在、争点になっているいくつかの問題を取り上げる。

現在、聖書記述の史実性に関してとくに争点となるのは、ダビデとソロモンによる統一王国に関する問題だろう。統一王国に関する記述を、聖書記述の少なからぬ部分について歴史的信頼性が否定される「前の時代」に含めるのか、それとも、聖書記述の信頼性の高い部分も多いと考えられる「後の時代」に含めるのか。一九九〇年代以降、喧々譁々たる論争になっているこの問題について、著者の立場は、統一王国に関する聖書記述について歴史的信頼性をすべて認める、とか否定するといった「オール・オア・ナッシング」的な捉え方は慎まねばならない、というものだ。

これに関連して問題となる鉄器時代Ⅱ期の実年代論争については、低年代説の論者と伝統的年代の支持者ともに、放射性炭素年代測定法という「科学のメス」を利用して決着しようとしたが、両者とも自説に有利な結果が出たと主張し、客観的と期待されていた「科学のメス」も実は恣意的な解釈の余地があることがわか

る。また、この論争の背景には、当事者が聖書の記述に対して取る立場、あるいは心情が絡んでいる場合もあり、聖書の史料価値を最小限にしか認めない「ミニマリスト」と逆に最大限に認める「マキシマリスト」の対立という最近までよく話題にのぼった構図は不毛でしかない。

時代を遡つて、今日ではもはや論じられること自体が少なくなつた父祖たちの物語の歴史性、あるいは、現在の資料のみから生産的な議論をすることが困難な出エジプトの伝承などについては、むしろ、こうした伝承が成立した時代に目を向けて、その伝承が当時の読者に伝えようとしたメッセージや、伝承をまとめた人物の意図などを明らかにする方が、たとえそれが虚構であれ本当に起きた事件であれ、その出来事の重要性についてより有意義な議論ができる。たとえば、出エジプトの伝承が重要なのは、著者によれば、各預言書において、神との契約を遵守すべき最も基本的な歴史的理由として出エジプトが言及されていて、遅くとも王国時代末期までに、出エジプトの伝承がユダの人口に膾炙し、史実性を措いても、伝承・伝統としての「出エジプト」がユダヤ人とその信仰とアイデンティティーにおいて重要であり続けた事実そのものなのだ、ということになる。

以上のように、聖書の記述の史実性を問うことで、聖書の書き手が同時代の読者に伝えようとしたメッセージを解説する、という著者の方向性は終始一貫して明快だ。批判的な聖書学に携わる研究者の中には、聖書の編集の歴史や編集者が用いた史料の推定など、裏付け不可能な「仮説」の提出、テキスト研究に終始

し、実際に過去に何が起こったのかという点にあまり関心を示さず、聖書の文学的研究それ自体が自己目的化して、歴史の再構成を志向しない傾向があるという。これは、聖書の記述を無批判に史料として用いてきた過去への反動として生まれてきた立場であり、その結果、族長時代の歴史や土地取得時代の歴史は、今や大筋で否定されるようになったのだ。

著者自身、本書の続編『旧約聖書の謎——隠されたメッセージ』においては、よりいっそう、聖書のテクスト的・文学的な研究の方向に舵を切り、列王記上二〇章に見えるアフエクの戦いについてオリジナリな見解を提示している。列王記によると、アフエクの戦いでは、数の上で圧倒的に優勢なアラム軍に対し、弱小のイスラエル軍が、しかもアラム軍が得意とする平地戦で勝利したと記されている。しかし、この物語を文学作品として分析する著者の研究では、語彙や表現、主題の検討から、この「出来事」は、神の卓越性によって力の弱い軍隊が強大な敵を倒すという文学的テーマのもとに、「後代」（ペルシヤ時代）に創作されたフィクションだと考えられ、アフエクの戦いが史実でない可能性を考慮に視野に入れた方がよいというのだ。

実は、本書でも述べられているように、アフエクの町は、日本隊が発掘調査をおこなったガリラヤ湖畔のエン・ゲヴ遺跡がその候補地のひとつになっている。エン・ゲヴ遺跡の発掘調査では、「アクロポリス」からケースメート式城壁と列柱式建物など、鉄器時代Ⅱ期の建築遺構が確認され、イスラエルとダマスコのアラム人が盛んに戦争をしていた時代と重なることから、その性格や位置づけが課題となっている。「アフエク」の有力候補であるこ

の遺跡で発見された遺構・遺物が、まさに鉄器時代に関わる年代論争の渦中にあることについてはかねて承知していたが、アフエクの戦いに関する史実性にも関連する文学的な研究とその評価に関しては、今回、著者から学ぶところが大きかった。

評者は、考古学を専攻し、「聖書の土地」をフィールドとして発掘調査に従事しているが、評者の研究の焦点は考古学にあつて、「鉄器時代の建築と都市構造」、「青銅器時代のセトルメント・パターン」といった即物的な研究テーマになりがちである。これに対して、著者の長谷川氏は、考古学と文献学の双方に通じ、両者を行き来しながら、古代イスラエルの歴史と文化を縦横に論じている。文献史学・考古学それぞれの成果を、それぞれのエキスパートが持ち寄って対話することによって、広い意味での歴史の理解に大きく貢献することが可能とする著者の主張は、評者も含めて異論は少ないだろう。著者の長谷川氏はひとりですれをなしとげ、六年に及ぶテル・アヴィブ大学留学中、現在と過去を同時に学ぶよううで、物事をより批判的、客観的に見る訓練の場だったという、その得がたい体験の成果が本書ではいかに発揮されている。なお、この著者のことだから、「聖書考古学」に対する学問的成果の紹介を超えて、著作の中に、聖書の「申命記作家」の場合と同じように、現代の同時代を生きる我々読者に対して、読み解きが必要な何かしらのメッセージを端々に埋め込んでいくに違いない。それについては、ここでは触れないことにして、是非、本書を一読して自身で確かめてほしい。

本書でひとつ腑に落ちない点があるとすれば、それは、「聖書考古学」という本書のタイトルが内容に少しそぐわないことだろ

う。つまり、「聖書の舞台となった古代パレスチナを中心とした考古学」に関しては、層位学や型式学、発掘の進め方といった実際の方法を概略的に記すのに止まっていて、体系的な記述や学説史の説明がなされているわけではない。はっきり言えば、聖書の記述に沿って、考古学による発掘の成果が必要に応じて聖書の記述との関連で断片的に取り上げられているだけにすぎない。また、「聖書の歴史記述の深い理解」に到達するため、聖書の書き手のメッセージを読み解こうという著者の試みは意欲的なのだが、その方向性を突き詰めると、聖書の文学的な研究への傾斜が進み、考古学からますます距離が遠ざかってしまう。「聖書考古学」と言った場合、その学問的な営みは、ふつう、聖書の読み解きではなく、発掘調査や遺構・遺物の研究が主眼になるだろう。その意味で、聖書のメッセージの読み解きに力点を置いた本書のタイトルは、やはり誤解を招くものであり、「聖書考古学」というよりは、「考古学と古代イスラエル史」あるいは「考古学からみた聖書の史実」といったものにすべきだっただろう。

(iii+二三七頁 中公新書二二〇五 中央公論新社)

二〇一三年二月 税別八四〇円

(天理大学教授)